

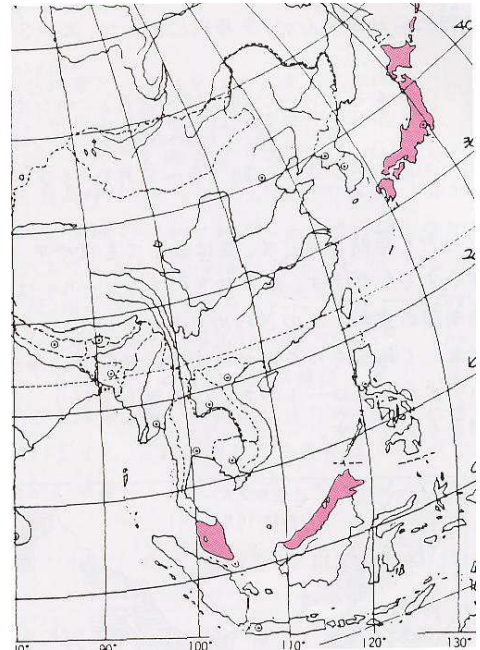
マレーシア ジョホール日本人学校

北海道十勝 鹿追町立瓜幕小学校 須田 慎二

1、マレーシアの概要

マレーシアは、マレー半島の南半分(西マレーシア)と、ボルネオ島の北部(東マレーシア)から成り、いずれも北緯1～7度に位置している。国土面積は約33万km²(半島部分の西マレーシアが13万km²、ボルネオ島北部の東マレーシアが20万km²)で、日本全土の約9割になる。また、半島部の60%、東マレーシアの70%は森林に覆われている。

赤道に近く、年中熱帯性気候の常夏で、四季の変化はない。気温も年間を通じて変化が少なく、1日の平均気温は26～27℃。年間を通じて、昼は熱帯特有の強い日差しでかなり暑い(通常31℃前後)が、夜間から早朝にかけては23℃前後に下がり、日本の真夏よりはむしろしのぎやすくなる。昼夜の長さも年間を通してほとんど同じで、朝夕の薄明かりは短時間。日本との時間差は1時間で、日本で正午12時のとき、マレーシアでは午前11時。



西マレーシアでは、マレー系がイスラム教徒、中国系が儒教、道教、仏教などの信者、インド系がヒンズー教徒であり、このほかヨーロッパ系住民やユーラシアン系はキリスト教徒が多く、北部の少数タイ系住民には仏教徒も見られる。一方、東マレーシアでは、先住民族が土着信仰で、また、昔からキリスト教の伝道が活発だったため、イスラム教、中国系宗教信者のほか、キリスト教徒も相当数存在する。

国教であるイスラムの首長は各州のサルタンで、サルタンのいない州では、国が任命する州主席大臣が首長となる。

多様な民族で構成されるマレーシアでは、日常、マレー語、英語、中国語(北京語、広東語、福建語、潮州語など)、タミール語など多数の言語が使用されている。しかし、西マレーシアでは1967年から、東マレーシアでは1973年から、マレー語が「国語、公

用語」と規定され、それまで公文書や教育上の言語として使用されてきた英語にとって代わるようになった。現在、家庭に送られてくる公共料金の請求書、道路標識などはすべてマレー語表示であり、クアラルンプールの街中には”Cintailah Bahasa Kita!”（私たちの言語を大切にしよう）の看板があちこちに立てられて国民にマレー語使用を呼びかけている。しかし、英語は第2言語として小学校から教えられており、ビジネスにおいても広く使用されている。クアラルンプールなどの都市部では英語がほぼ通用するが、地方ではマレー語でないと通じないところもある。

2000年の総人口は2327万人で、このうち7.4%が外国人になっている。80%は半島マレーシアに、20%が東マレーシアに住んでいる。人種構成は、ブミプトラ（土地の子）と呼ばれるマレー系が65.1%、中国系が26.0%、インド系が7.7%、その他1.2%となっている。

西マレーシアの開発の進んだ西海岸諸州には中国系が多く、マレー系、インド系も西マレーシア全体に及んでいるが、東マレーシアにはイバン、カダザン、パジャウ、チルートなどの原住民が多く、サワラク州の約半分、サバ州の4分の3は非半島系、非中国系。

人口密度は1km²当たり70.5人で、ASEAN5ヶ国の中では最も低い。都市の人口では、クアラルンプールの約130万人、ジョホール・バルの102万人、イポーの47万人が目立っている。

2、ジョホールの概要

西マレーシアのマレー半島最南端部にあるジョホール。ジョホールとは州の名前であり、日本人学校はジョホール州の州都であるジョホール・バルにある。ジョホール・バルはサッカー日本代表が初のワールドカップ出場権を獲得した「ジョホール・バルの歓喜」の舞台でもある。



美しいアブバカルモスク

州の人口は、280万、州都のジョホール・バルは約80万人。近年、隣接する大都市シンガポールとの「イスカンダル計画」により、都市の近代化が進みシンガポールや日本からの移住者が急激に増加している。高速道路の建設が進み、レゴランドやアウトレット

モールなどができ、3年間で一気に町の様子が変わっていった。また、イギリスの名門マルボロ大学の小中校一貫インタースクールが開設し、教育的にも注目され始めている。

3、ジョホール日本人学校の概要

1997年に開校。2012年度児童81名 生徒27名 計108名の在籍。派遣教員13名 現地採用職員8名（英会話講師 3名 事務職員3名 養護教諭1名 用務員1名）

学校は静寂な地域に、校舎、体育館、プール、運動場等を有した小中併置校。小学生と中学生がスクールバスで一緒に登校している。「ジョホール日本人学校のいいところは？」と、子供たちに聞くと「小中学生の仲がよいところ。」という答えが返ってくる。アットホームな雰囲気



日本人学校グラウンドにて

の学校である。

4、ジョホール日本人学校での特色ある教育

①遠足（5月）

新年度が始まってすぐに行っていたのが遠足。広く安全な公園で実施していた。子供たちは安全性の関係で普段の生活では、なかなか公園に行って遊ぶということはいない。この時とばかりに大きな公園で走り回り、新しい友達と交流を深めたりしていた。凧作りやカレー作りに取り組んだ。



マレー伝統の凧づくり

②運動会

小中合同で行う運動会。保護者がとても楽しみにしている行事の一つ。クラスを赤組白組に分けての日本伝統のスタイルで実施。猛暑の中で、子供たちは全力を尽くす。私は3年間、運動会を担当させていただいた。小中



小中合同運動会

合同運動会ということで、小中学生が一緒に取り組み高め合うことを目標に工夫もしてみた。この行事の思考錯誤は私にとってとても貴重な経験となっている。

③修学旅行

小学部は5・6年生が2泊3日で実施。目的地は、マレー半島北東にあるプルヘンティアン島とボルネオ島の都市クチンを1年ごとに交代。子供たちは、マレーシアの大自然を満喫することができる。きれいな海でのシュノーケルは、子供にとって最高の思い出になっていた。



小学部修学旅行 シュノーケリング

中学部は、ボルネオ島に3泊4日で現地少数民族へのホームステイを中心にマレーシアの文化を体感。日本では決してできない貴重な体験をしていた。

④国際理解交流

現地の学校と2～3回の交流を実施。日本人学校へ招待した時は、日本文化を紹介しながら交流できる活動を行い、現地校へ訪問した時は、マレーシアの文化を体験した。子供たちは英語を使い、現地の小学生とコミュニケーションを積極的にとろうとしていた。数十分経つと、すぐに笑顔で



マレー伝統の踊り ザピン

会話をするようになっている。子供は国籍や人種は関係なく、すぐに打ち解ける。子供の姿に言葉の間違いを怖れずコミュニケーションをとろうとする姿勢の大切さを再認識した。

⑤水泳学習

マレーシアは1年間通して25度以上あるため年中プール使用が可能である。ジョホール日本人学校にもプールがあり、子供たちは水泳を楽しみにしている。残念ながら現地校でプールを持っている学校はほとんど無いようである。そのため



水泳の授業 3月!

出会ったマレー人はほとんどが泳げないと言っていた。

⑥英会話

小学部は週3回、中学部は週2回の実施。現地採用の3人の講師による習熟度学習を行っている。マレーシアの公用語はマレー語だが、ほとんどの地域で英語が通じる。そんな中で過ごしている子供たちはどんどん英語を習得していく。3年間で子供たちの上達を目の当たりにした。外国語教育には環境の影響が大きいと感じた。



英会話の授業

⑦たてわり活動

1グループ10人程度のたてわり班をつくり活動していた。中規模校のため日常から他学年の児童生徒と触れる機会も多い。外国の方の考えや文化を受け入れていくためには、まず身近な友達や上級生下級生とも交流を深めることが大事。たてわり遊びの時間は、低学年の子供たちが高学年や中学生の子供たちと触れ合うことをとても楽しみにしている。



たてわり班で話し合い

⑧ペスタクラパ

子供たちも保護者も楽しみにしている大きな行事。学年ごとに劇を発表し、全校合唱や全校アートを披露する。子供たちが主体となり、長い時間をかけて取り組むので、ペスタクラパが終わった時の充実感は言葉では表せないほどだ。



4年生 劇 どろぼう学校

※ペスタクラパは、マレー語でペスタ（フェスタ）クラパ（ヤシの実）という意味。

⑨放課後部活動

週2回の部活動を行っていた。休日や放課後に運動する機会が少ないため、体力増進の機会を作ることがねらい。サッカーを中心に色々なスポーツを行った。保護者からは、もっと時間を長くしてほしいという希望もあったが、なかなか難しい状況である。どの国の日本人学校も体力に関する課題は共通しているのではないかと。



アルビレックス新潟シンガポールによる サッカー教室

⑩PTAボランティア活動

保護者の方には、たくさんのご協力をいただいている。カレー曜日（年に3回保護者の手作りカレー）、お話の会（朝の会で絵本）、百人一首大会・かるた大会（変装した保護者・教員が盛り上げる！）など。



PTA主催 百人一首大会

⑪校外学習

毎年、教科書の教材に合った現地素材をいかした授業を行っている。校外学習もその一つ。4年生では、マレーシアが体感できるマレー村、マレー伝統産業のピューター工場、ごみ処理場、浄水場を見学した。どの場所でもマレーシアの人たちは日本人学校の子供たちをやさしく迎えてくれたおかげで、日本と同じように体験学習を行うことができた。



マレー伝統の踊りを体験



マレーの伝統産業 ピューター工場見学

⑫墓地清掃

年に2回、日本人墓地清掃に取り組む。ジョホールで暮らし、亡くなった日本人の方々のために心をこめて清掃をする。清掃後には、日本から和尚さんに来ていただき、墓地供養も行われる。



墓地清掃

⑬日馬（にちま）フェスティバル

日本人会、JAGAM（ジャガム 日本への留学経験がある方々が中心の協会）が主催となり開催する大きな行事。毎年、多くの日本人・マレーシア人が参加し大盛況。日本食屋の方々がブースを出し、日本食を堪能できる。学校行事ではないが、日本人学校の児童生徒も多数参加。5年生～中学3年生は南中ソーランを披露。たくさんの方が注目していたので、子供たちは気合入りまくり。私は、企業の方々と協力して「餅つき」の紹介。すぐに完売するほど大人気コーナーだった。そして、イベントの一番の見どころは、盆踊り。浴衣を着たマレーシア人たちも多かった。百人以上が一緒に踊り、手をつなぎ輪とった瞬間、マレーシアの人たちと心もつながったと感じた。



もちつき大会



浴衣を着て記念撮影

5 雑感

帰国当日、ジョホールの地を離れシンガポール・チャンギ空港への帰路。なんともいえないさびしい気持ちになった。「何度も何度も見てきたこの風景が、もう見られなくなる。」そう思うと、自然と目頭が、、、。3年間でジョホールのことが大好きになっていた。マレーシアのことも出会った人たちのことも。

3年間を振り返ると「出会い」この言葉に尽きるなと感じている。たくさんの方に出会い、助けていただき学ばせていただいた。

特に日本人学校現地スタッフには私の家族を含めて何度となく助けていただいた。異国

の地での生活に戸惑っていた私たちをあたたかく迎えてくれたことが忘れられない。6歳になる娘は言葉や風景は忘れても、お世話になったマレーシアの方々の顔と名前だけは覚えていてる。

保護者の方からは、海外での日本人として生き方を学んだ。全国から集まった方々とソフトボール、バレーボールなどを通して交流も深めた。出会った方々と今まで歩んできた道を語り合ったことから数多くの発見があった。

そして、日本人学校の子供たちには、全員が協力し合い勉強したり運動したりする学校の素晴らしさを改めて教えてもらった。全国から集まった子供たちが奇跡的にジョホールの地で出会い、切磋琢磨しながら成長していく。異国の地でもたくましく生き抜いていく姿に私も勇気もらった。

最後に、マレーシアという国から相手を尊重しあい生きていくということを学んだ。たくさんの人種・宗教が入り混じる環境の中、彼らは一緒に働き一緒に生活していく。もちろん衝突が無いということでない。むしろたくさんある。それでもお互い折り合いをつけながらマレーシア人は生きている。相手の事をリスペクトする。国際理解の原点のような気がした。

3年間の「出会い」から学んだことを、今後の教員生活で出会う子供たちのためにいかしていきたい。



ユーラシア大陸最南端の地 タンジュンピアイ